

磐 梯 紀 行

小野川発電所工事を視る

紅葉には少し早いですが、十月十一日の土木學會の秋のエキスカージョンに参加して、磐梯山麓の小野川発電所工事を視る機会を得た。土木學會の見學旅行も今回で第二十五回目であるから、準備萬端至れり盡せりで、毎回参加會員の何れも満足してゐる處であるが、今回の旅行に於て集合所を會津若松驛前とされたが、之は從來通り上野驛にて集合受付を行ひ、成るべく同一列車にて行を俱にし、且つ上野驛より會津若松驛までの七時間餘の車中の無聊を有効にすべく、見學視察ヶ所の説明印刷物等も前以て配布されたら一層効果的であつたと思はれる。

東山温泉に於ける大懇親會

會津若松驛に下車した會員は學會係員其他に迎へられて直にバスに同乗し、市外の東山温泉に向ふ、途中の道路は一部コンクリート舗装中の處もあつたが、數年前に比し大に改良されてゐる。東山温泉は湯川對岸にある向瀧旅館に入る、向瀧旅館は東山温泉の一流旅館であるが、最近新館の増築成つて面目を一新してゐる。温泉は鹽類泉で無色透明、花崗石張りの新浴槽に滾々として溢れてゐる。一浴して直に大廣間の宴會席に入ると百餘名の宴席はずでに調つてゐる。床の間を控へて上手には井上會長、名井那波の兩前會長を初め其左右には遠藤、上野、藏重、山本、楠田の諸氏、それより前の兩側及中央列に各地より参加した老若の會員が席を列ねて座し、中々の盛觀である。一同着席揃ふや、東京電燈株式會社を代表して小野川建設事務所長大島滿一氏立つて歓迎の辭を述べられ、次いで福島縣土木課長河合清氏立つて歓迎の辭を述べられ、次いで會員一同を代表して土木學會長井上秀二氏立ちて例の明快なる辯舌にて町重に謝辭を述べられ、一同拍手を以て之に應じ、直に酒宴に移つた。酒間を取持つ東山温泉の紅裙連數十名、宴酣となるや大島氏の紹介に依つて一老妓の會津大津繪白虎隊の俚謠に始まり、次いで東山音頭に笛や太鼓と三弦合奏となり、主客連合假裝連中も加はりて席上は盆踊りの賑かき、遂に井上會長も姉さんかぶりの婦人に假裝して踊に加はり、妥



(1) 懇親會場向瀧旅館。

に平民會長ぶりを遺憾なく發揮して大拍手を浴び、一同歡をつくして各自室に引あげたのは十時すぎる頃であつた。

白虎隊の墓と蠅蝶堂

十一日午前九時東川温泉を出發して、一同五臺のバスに分乗し、白虎隊の遺跡飯盛山に向ふた。白虎隊自刃の場所は今尚ほ松籟の地で遙かに鶴ヶ城趾を望む昔乍らの展望である。墓所は同形の小さな石碑が簡單に列んでゐる。伊太利のムソリーニ氏及ドイツの青年士官などから贈られた記念碑が異彩を放つてゐる。一々管理者から説明を聞いて回顧の念にうたれる。山腹に蠅蝶堂と云ふ特殊建物がある。木造で六角三層であるが階段がなく一定勾配で通り抜けとなつてゐる、寛政八年に西國三十三ヶ所の觀音靈地を一堂の内に巡らす意味で建立したものと事であるが、今日では此の構造が多層式自動車庫の標本となりつゝあると云ふのも面白い事である。

仙石貢博士の遺業

仙石博士は鐵道大臣として若槻内閣の重要な椅子を占め、且つ土木學會の會長にも押された人で、鐵道電氣と併んで政治的にも大なる功勞者であつたが、特に晩年自費を投じて猪苗代湖畔、十六橋の勝地にバンドールン氏の銅像を建立された一事は、何より立派な遺業の一つとして輝かしいものである。バンドールン氏はオランダの土木技師で、明治初年日本政府に招聘され、猪苗代湖の水利に就て先覺的指導を與へた人である。現在十六橋畔に存在してゐるウォーター・ゲージはバンドールン氏の設置せしめたもので、今日まで六十年猪苗代湖の水位は記録されてゐるのである。仙石氏が同僚白石元治郎博士等

と俱に猪苗代水力発電所建設の大工事を興すに當つて、バンドールン氏の隠れたる技術的功勞が幾多の参考となつた事であらう。此の銅像を建立された時は仙石氏は既に病床にあつた、而して仙石氏は自ら此銅像を見ずして逝去されたのである。

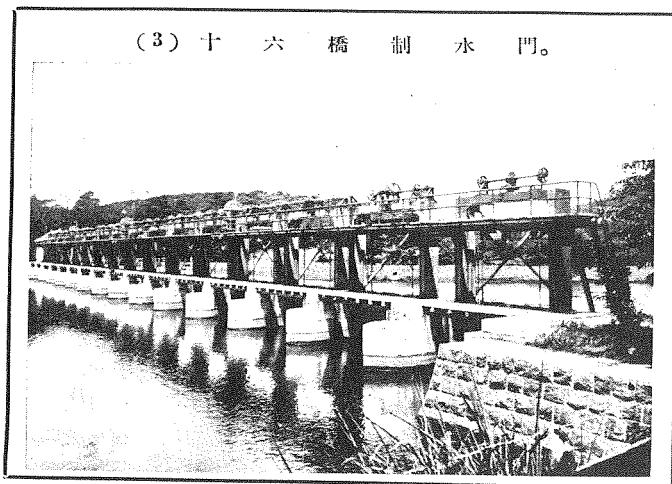
日本國內に建立されてある外人技師の銅像は、此外に札幌驛前のクロフォード氏のある。クロフォード氏の銅像は松本莊一郎、平井晴二郎兩氏の銅像と併んで三體同時に建立されたものである。

猪苗代から磐梯山麓の各水力発電所が發展し行くにつれ、仙石、白石兩氏の功勞も必ず此の附近で記念されることであらう。私達は今日磐梯山と仙石博士を結びつけて何かしら因縁の深いものがある様に思ふ。先年我工事畫報に於て仙石貢博士追悼の特輯號を發行した際に、那波光雄博士より此のバンドールン氏銅像の記事及寫眞を寄せられたのであつたが、本日は銅像建設の任を仙石博士より委託されて除幕式まで主催した井上秀二氏が、感慨深げに一同に説明を與へられた。

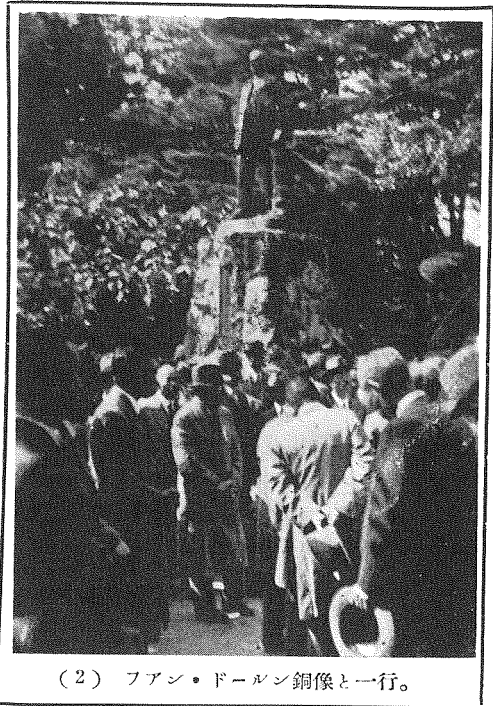
猪苗代湖の十六橋に於て大島氏より東京電燈株式會社の既設發電設備其他の説明を聞き、再び自働車に同乗し、湖畔の野口英世博士の生家の裡をすぎ、猪苗代町を過ぎて長瀬川に沿ひ、左手に近く磐梯山を眺めながら秋元湖に着いた。

小野川發電所工事裏

秋元湖の西北隅に少し灣入した干潟がある、其が小野川發電所の放水路となるので、其丘の麓が發電所の建物の位置である。一同此處に集合して大島所



(3) 十六橋制水門。



(2) ファン・ドールン銅像と一行。

長及山日直樹、熊川信之技師等から夫々説明を聞く。

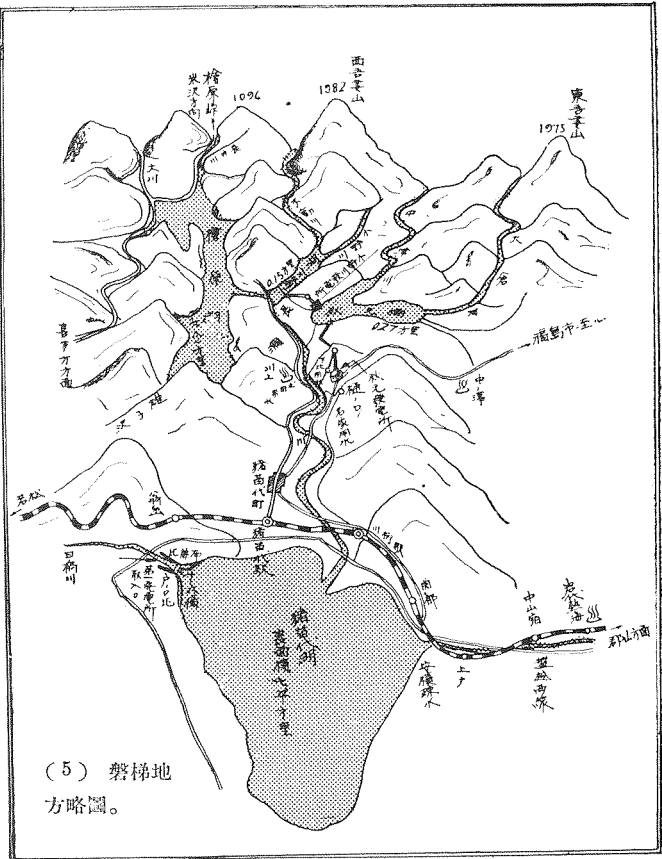
小野川發電所は東京電燈株式會社が今年四月認可を得て、七月から工事に着手し、飛鳥組の請負工事目下晝夜兼行施工中のもので、明年十一月には竣工の豫定である。

小野川發電所は其計劃に於て特異の性能を有するものとして數年前から注目されてゐた。それは水量や落差の大なる割合に水路や隧道が短く、大堰堤等

もなく、最も地の利を得た實に理想的な水力発電所だからである。即ち其水量は一千八百個、落差は二百五尺、斯くて最大出力二萬六千五百キロを得んとするものである。此發電所工事が竣工の曉は我國の既設發電所建設費のキロ當りに於て最低價のものとなるべく、此點は我國將來の水力利用上にも幾多の参考資料を投ずるものとならう。工事は既に發電所基礎コンクリートを打終り、見學當日はドラフトチェーンの上端が現はれてゐた。目下は此發電所コンクリートに主力を注ぎ、嚴冬期迄には

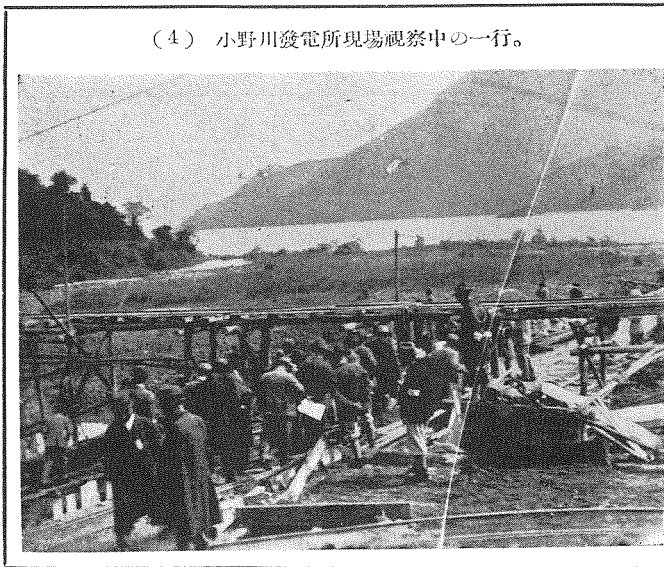
建物のコンクリート施工も終了の豫定である。従つて目下のコンクリート作業は急速なる工事であるが、施工設備や材料運搬設備等を見ると何れも簡単に整頓されてゐた。

鐵管路は傾斜地の切取工事を終り、將に基礎コンクリートの準備中で其上の隧道工事は既に堅坑を終り、近く導坑掘鑿に着手するとの事であつた。隧道の地質は第三紀層であるから掘鑿も難工事と稱すべき箇所はなかるべく、今日の豫定よりすれば工事は總て順調に進むものと見られる。大島所長は設計と施工の完璧を期して尙且つ一キロ當り建設費の新記録を出すべく非常な努力と意氣込である。最も本工事は全部飛鳥組の隨意契約の下に施工されてゐるもので、各種工事單價の如きも割合に低廉のもので飛鳥組としても犠牲的努力を拂ひつゝある由である。斯くて此の小野川發電所建設工事は明治以來幾多先輩の成果を大成する光榮を擔ふたものとして意義深い工事が進められるのである。



(5) 磐梯地方略圖。

斯くて一同は秋元湖の堤上に特設された午餐の席に案内され、鏡の如き湖面と周囲の翠嶺を眺め乍ら、



(4) 小野川發電所現場視察中の一行。

猪苗代町の紅裙連に接待されて景と食を満喫した。席上大島所長の説明と挨拶に次ぎ飛鳥組専務兒王靜雄氏の挨拶があり、次いで井上會長より兩氏に對し會員一同を代表して謝辭を述べられた。食後堤防下に一同の記念撮影あり、次いで五色沼のハイキングコースに向つた。

磐梯三湖と五色沼

猪苗代湖が海拔千六百九十六尺、秋元湖が海拔二千四百二十八尺、小野川湖が海拔二千六百三十二尺、檜原湖が海拔二千七百十三尺にして、此等四湖が階段狀になり、猪苗代湖が最下段に在りて面積最も大、周圍十七里に達する。他の三湖は面積小



(6) 記念撮影・寫眞最前列向つて左から最初が伊藤長右衛門氏、3人目那波光雄氏、8人目井上秀二氏、其隣名井九介氏、次が大島滿一氏、竹股一郎氏等。

にて何れも磐梯山の北方に在る。此等四湖の貯水量は合計二億四千三百萬立方米に達し本邦隨一の天然貯水池と稱される。而して猪苗代湖の貯水を利用する発電所は四ヶ所ありて、既に大正十五年迄に合計九萬七千キロワットを發電してゐる。それに今回工事中の小野川発電所及び計劃中の秋元湖発電所等を加算すると、近く二十萬キロワット位に達するものと思はれる。

太平洋と日本海の分水嶺地帯に在る此等の大小の湖沼は何れも磐梯山の爆發に因り生じたもので、猪苗代湖は大同元年(1130年前)の大噴火に伴ふ陥没により、亦秋元、小野川、檜原の三湖及其他の沼は明治二十一年の破裂の爲に地形を一變して出来たものである。明治二十一年の破裂は蒸汽の爆發であつたから熔岩などは全然なく、破碎されたる大小の岩石と泥流とが一時附近村落を押し流した。地學者の調査によると其容積は

二十立方料に及んだとの事である。爲に磐梯山の七合目以上は飛散し、北側の山形は一變し、山麓十數料の一帶は地形を一變し、樹木も、人家も總てを埋没して了つた。之が犠牲となつた人命四百餘人と記録されてゐる。

今日から約五十年前に斯かる變災のあつたと思

(7) 猪苗代湖貯水池風景。



へぬ磐梯山の静かな姿は大小十数々の湖沼と相對して自然の一大公園をなしてゐる。

裏磐梯のハイキングコースは磊々たる巨巖と碎石と雜木雜草の間に點在する數多の沼池とな、自然の儘に歩み、自然の儘に眺める良き路である。沼の水は群青と乳白を混合した様な獨特な神秘色を有し、將に紅葉の期は五色以上の景勝であらう。徒歩三十分餘にして檜原湖近くの温泉ホテルに休憩し、一同バスを連れて猪苗代驛に下つたのは暮色迫らんとする頃であつた。此所で飛鳥組の好意による會津名産の土産物などを贈られ、仙臺に、新潟に、東京にと夫々の路に別を告げる、東京への車中は同行者も多く、飛鳥組よりの晩餐の寄贈等もありて非常な賑であつた。

本稿を擱筆するに當り、前會長名井博士の清吟を得て情趣亦新なるものがあります。以下博士の句。

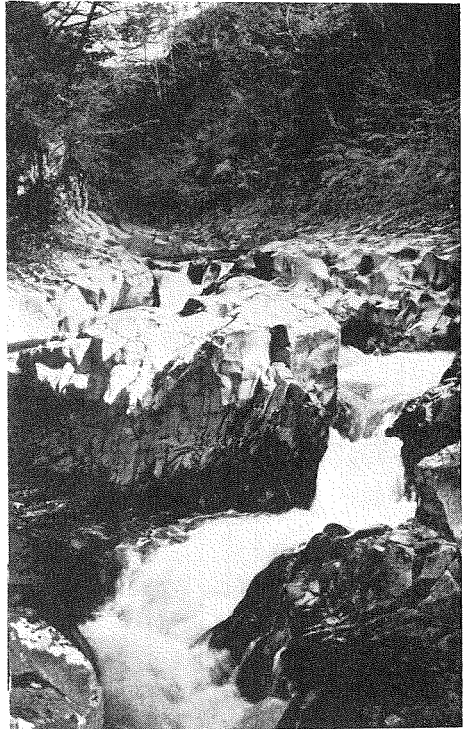
名井 芦城

土木學會秋季會津地方旅行

果てしなく穂波漂ふ稻の秋
盤梯を右に左に秋の車窓
城址や會津四郡の秋晴るゝ

東山温泉五句

秋の暮早々灯りたる温泉宿哉
秋の灯に襦袍集めぬ大廣間
秋の夜や盡きせぬ興の盆踊



(8) 秋元湖の水源。

枕邊に夜寒の鼾聞きにけり
朝寒の香立つ温泉に浸りけり

白虎隊の墓

丘紅葉染むも血汐の名残かや

長工師ファン・ドールン銅像

秋光の銅像仰ぐ十六橋
木の間より白き土藏や柿の秋
稻塚や會津平に冬近し
末枯や續けるバスの土煙
湖を前に。餉の卓や山粧ふ
五十年の昔思ふや秋の湖
荒涼の山裾潤し花芒
秋晴や裏盤梯の五色沼

猪。代驛解散

それぞれに秋の入日に別れけり
秋の夜の自己紹介や増結車

(9) 五色沼より磐梯山を望む。

